

## 北海道苫前にて発見された風力発電機に衝突死したとされるオジロワシ含む鳥類剖検所見と野生動物医学的検討課題

○浅川満彦 1・吉野智生 1・相澤空見子 1・小野宏治 2・水野直治 1・横田 博 1・長雄一 3・谷山弘行 1 (1 酪農学園大学獣医学部、2 北海道海鳥センター、3 北海道環境科学研究センター)

はじめに 2004 年 2 月から 4 月にかけて、北海道苫前町の風力発電機周辺で、4 例の野生鳥類の死体が発見され、それらの剖検が、環境省自然環境局の依頼で本年新設の酪農学園大学野生動物医学センター(以下、センター) で実施された。今回は、それら所見を記し、今後の課題について述べる。

剖検所見 センター登録(括弧内番号)番号順に、剖検所見の概要を列挙する。なお、第二および三例の発見日は 3 月 15 日か 4 月 28 日のいずれかである。一方がトビと誤同定され凍結保存されたが、剖検時で両者の識別がされていなかったため、このような記載となった。すべての体部標本は、骨断面の比較検討などのため、20%ホルマリン液で固定後、水洗・乾燥を行い、永久標本とし、現在、センターに保存されている。

第一例(AS 3485) オジロワシ *Haliaeetus albicilla* (幼鳥)(発見日 2 月 5 日): 体表に目立った汚れ、食痕、血痕、車輪痕、銃創、外傷などの形跡無し。体部は腰部で離断。椎骨など骨切断面著しく粗剛。骨断片が断面周辺に結合組織により懸垂。胸骨体および胸骨突起の骨折。肝臓、消化管の欠損。心臓、食道、気管・肺、胃(一部)が残存。膿瘍、腫瘍などの異常所見無し。肺に物理的な影響とされる出血斑。

第二例(AS 4336) オジロワシ(幼鳥): 本例で胸部と腰部との間が幅の狭い皮膚で連結している点および内臓が完全に欠損(腰から脚部筋肉も欠損)している点を除けば、体表と内部の剖検所見は、第一例のそれとほぼ一致。

第三例(AS 4337) トビ *Milvus migrans* (若鳥): 前部頸椎破砕を伴った頭部欠損。右翼前腕骨、骨折。内臓欠損。胸部皮膚に円状の食痕。

第四例(AS 4338) オオセグロカモメ *Larus schistisagus* (成鳥)(発見日 4 月 30 日): 両脚と尾部の欠損するが、内臓は残存。概ね体表には異常所見は認められないが、腹部に他の動物による食痕と見られる損傷。

まとめ 今回の第四例を除く 3 事例の剖検所見で特徴的なことは、体表における異常所見を認めなかったこと、体部が腰部を中心に切断あるいはそれに近い状態にあったこと、内臓の一部あるいは全てが欠損していたこと、粗剛な骨断面と破砕された骨片が認められたことなどから、

1) 飛翔中に急激かつ強力な体部中央部を切断するに十分な物理的外力が加わったこと、2) 切断に関与する物体の形状は、断面の形状から鋭利な刃物ではないこと、3) 切断された後、内臓の離断、散布が生じたこと、などが示唆された。井上・籠島(2004)が長崎県福江島における 2 個体のトビ衝突事例の外部所見とほぼ一致し、これらとの間に密接な関連性が指摘された。

課題 内臓を欠損することは、感染症分析用試料が限られることを意味する。しかし、第三例を除く検体で、喉頭から気管のスワブをインフルエンザ簡易キット(QuickVue, 米国 QUIDEL 社)により検査し、陰性結果を得た。今後は、残存内臓や風切羽を利用したウイルス検出および水銀など重金属の分析を行い、これら野鳥の生前の健康状態について検討予定である。

謝辞 通常、このような死体は記録がとられた後、廃棄されることが多いが、適切に冷凍保存されていた(株)ユーラスエナジージャパンに敬意を表する。国内の衝突事例をご教示頂いた「日本野鳥の会」の東陽一および植田睦之の両氏にも深謝する。病因分析は、環境省環境技術等推進費公募型研究予算補助研究「野生鳥類の大量死の原因となり得る病原体に関するデータベースの構築」と文科省ハイテク・リサーチ酪農学園大学助成研究「環境汚染物質・感染病原体分析システムの開発」により実施された。

参考文献 井上勝巳・籠島恵介(2004) 風力発電機に衝突して落鳥したトビの事例.Strix, 22: 189-191.